

くるみくぼ

胡桃窪遺跡(範囲確認調査)

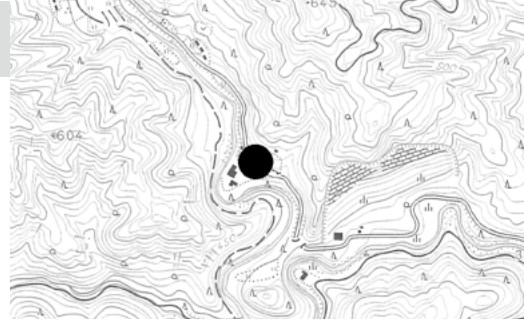
所在地 設楽町大字大名倉字胡桃窪、丸山地内
(北緯35度6分13秒 東経137度33分9秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年8月～10月

調査面積 494㎡

担当者 酒井俊彦・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財範囲確認調査として、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて平成28年8月から10月にかけて実施した。調査対象地の現況は段状に造成された水田と宅地跡である。標高は最も高いところで435m、低いところでは402mである。基本的に1m×2mのトレンチを設定して調査を行った。

立地と環境 胡桃窪遺跡は豊川の支流の一つである寒狭川の北岸丘陵部に位置する。遺跡は、寒狭川が北西から南東に流下する部分に、南西方向に向かって突出する丘陵の先端付近に位置し、段丘崖が発達する地形となっている。調査区中央南西側は製材所跡地の平坦な地形であったが、調査の結果、2～8mにおよぶ大規模な盛り土によって造成されたことが判明した。調査区北東側は尾根状の地形となり、北方の光石山候補地へと続いている。

調査の概要 調査区は112カ所、494㎡を設定した。製材所跡地の平坦面では、下位の遺物包含層を確認するためにトレンチを大きくして掘削を行った。

調査範囲は、南西向きの尾根状地形で、現況では大きく3つの段丘を数えることができる。下位と中位の段丘の間には製材所跡地の平坦面が存在するが、これは造成によるもので、ここにはさらに複数の段丘が存在していた可能性がある。

下位の段丘は標高403m前後にあり、これより下は現寒狭川の高水敷となる。この最下位の段丘崖裾にはTT117～TT120、TT123、TT124、TT142を設定した。これらのトレンチでは遺構や包含層は認められず、地表面の耕作土以下はすべて河川堆積の礫であった。

中位の段丘は417～424m付近に存在する。この段丘上では基盤層の直上に黒色土の堆積が見られ、灰釉陶器や縄文土器(押型文)の破片を検出した。この中位の段丘北西側は地表面に近い標高で岩盤や風化岩が検出され、調査範囲の北側尾根上には巨岩の露出も見られる。調査範囲の南東側ほど下層での岩盤等の検出は無くなり、耕作土や造成土が厚くなる状況である。この中位の段丘上ではTT11やTT92付近で湧水が激しく、湧水の流下する方向には黒色土などの堆積も無いことから、この周辺には湧水によって削られた小規模な谷状地形があったものと考えられる。

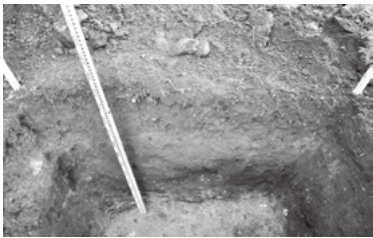
高位の段丘は428～434m付近に位置する。この段丘中の西側に設定したTT25では表土からではあるが灰釉陶器破片が検出された。TT24、TT25、TT30、TT36では黒色土の堆積が見られ、中位の段丘状で検出された黒色土と連続するものと見られる。

調査の結果、遺物は、TT32で押型文土器を検出(写真の最下層)、TT25、TT40、TT41、TT76、TT100、TT133、TT137で灰釉陶器の破片を検出した。この内、TT137からの出土は旧水田耕作土からの出土であり、再堆積土への混入の可能性が考えられる。

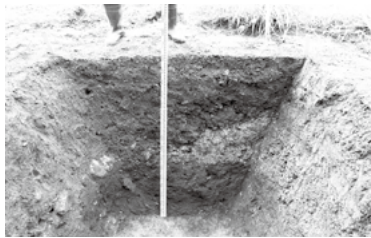
(鈴木恵介)



胡桃窪遺跡調査範囲 (S=1/2,000)



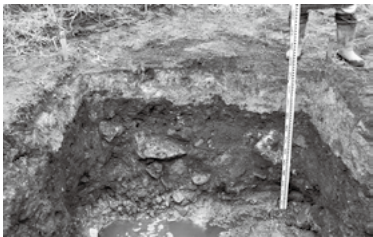
TT25(上層で灰釉陶器出土)



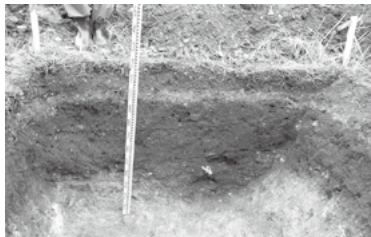
TT32(最下層より押型文土器出土)



TT40(最下層より灰釉陶器出土)



TT76(礫層の上で灰釉陶器出土)



TT100(最下層に落ち込みを確認)



製材所跡地(造成により形成)